

氏名	西郷 正浩
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	第101号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	「行為の保証」をくずすことによる「迷い」 ～コミュニティ形成支援を目的とした他者・空間を意識する空間～
審査委員	主査 教授 松井 紫朗 教授 礪波 恵昭 教授 小山田 徹 講師 金氏 徹平 講師 坂東 幸輔

論文の要旨

本研究は、コミュニティ形成の支援を目的としたハードウェアの概念整理と制作・実践である。対象とするコミュニティは、土地に根差したコミュニティであり、ネット上のコミュニティではない。対象とするコミュニティの形成不全が現代社会の様々な問題の根底にあることは間違いなく、不全の要因の一つとして、人と空間との関係不全にあるのではないかという問いが本研究の基点である。現代の空間は、人と空間、空間にある人と人との関係性構築を困難にしているのではないかという問いである。コミュニティ形成は、ともすると人と人との関係で、空間との関係は無いように捉えられがちである。本研究では、まず、コミュニティ形成を空間の問題として扱うために、「空間を伴う経験」という概念を用いてコミュニティ形成プロセスをモデル化した。次に、「空間を伴う経験」を促すためには、他者と空間を意識するための「迷い」が必要であること、また「迷い」が公共空間のもつ「行為の保証」によって低減されていることを指摘し、ハードウェアの在り方を整理した。その在り方に基づいてコミュニティ形成を支援していた事例の空間特性を考察し、それをヒントにハードウェアを制作して公共空間に持ち込み、実践を行った。

第1章では、背景として、コミュニティの諸問題とそれに対する取り組みについて概観し、本研究の目的と方法を述べた。被災地の避難所・仮設住宅、都市における孤独死、若年層の引きこもりなど、現代社会の多様な側面におけるコミュニティ不全に起因する問題と、コミュニティに対する取り組みの現状を説明した。さらに、芸術分野におけるコミュニティに対する取り組みについて、その起源について説明し、日本においては、アートプロジェクトの一つの分野に位置づけられること、さらに、社会問題との関係、被災地での活動へと展開されたことについて説明した。それらを踏まえた上で、本研究が対象とするコミュニティの説明とその形成を支援するハードウェアの在り方が目的であること、また方法として、コミュニティ形成プロセスを空間の問題として扱うための概念

構築、現在の公共空間の批判的考察、現代の公共という概念の価値基準からは除外されるコミュニティ形成を支援していたハードウェアの空間特性を用いることについて説明した。

第2章では、コミュニティ形成を空間の問題として扱うために、コミュニティ形成のプロセスの捉え方について述べた。まず、コミュニティ形成の基点を空間に包含される自己と他者と捉え、それらの関係によってコミュニティの基本的特性である「地域性」と「共同性」が形成され、結果としてコミュニティが形成されるという基本的なプロセスを定義した。次に、「地域性」と「共同性」は、「意味空間」と「共同経験」から形成され、またそれらは、自己と他者・空間の関係から形成される「空間を伴う経験」、及び、その「空間を伴う経験」を複数の他者と共有することで形成されると捉え、そのプロセスを「コミュニティ形成のサイクル」としてモデル化した。さらに、「空間を伴う経験」について、「自己と空間の関係」と「自己と他者の関係」について扱った既往研究をコミュニティ形成の観点で考察し、「空間を伴う経験」とは、「空間的・時間的・社会的定位」から形成される「空間イメージ」と「アイデンティティ」であり、それを他者と共有可能にする要因は、人が備えている「共感」であると捉え、モデルを再構築した。

第3章では、コミュニティ形成を支援するはずの公共空間の在り方が、コミュニティ形成不全の原因の一つであることを指摘した上で、「空間を伴う経験」にとって「迷い」が必要であることを述べた。現在の公共空間は、ユニバーサルデザインという概念によって、誰にでも対応できる便利で快適とされる空間は実現していると言えるが、その裏返しとして、人間の感覚に起因する行為を奪い、他者や空間との関係を妨げる結果になっていることを指摘した。その要因は、公共という概念及び公共空間を構成する物的要素によって保証された行為にあり、その「行為の保証」による「迷い」の低減にあることを説明した。さらに、「迷い」について既往研究に基づいて考察し、「空間を伴う経験」との関連性を「空間イメージ」と「アイデンティティ」の形成との関連から説明した。

第4章では、現代の公共という概念の価値基準からは除外されるが、コミュニティ形成を支援していたハードウェアとして着目した「お堂」と「お城」について述べた。「お堂」の実例として、愛媛県西予市城川町の「茶堂」群と筆者が居住する熊本県合志市野々島地区の「お堂」群とその一つである「毘沙門天堂」について説明し、「お城」は群馬県上野村で行われる行事について説明した。それらの「空間を伴う経験」としての空間特性、及び「迷い」による空間特性として「多様な場所の提供」と「多様な行為の誘発」として整理した。

第5章では、「お堂」「お城」にヒントを得たハードウェアの制作、及び、公共的空間へ適用した実践について述べた。モバイル型「お城」、モバイル型「お堂」、モバイル型「お堂」Ⅱ、スタティック型「お堂」を制作し、屋内での読書空間として3つの実践、屋内での将棋空間として1つの実践、屋外での歩行空間として1つ実践、計5つの実践を行った。それぞれの実践を、静止画とコマ撮動画によって記録し、行動パターンと「迷い」、「多様な場所の提供」・「多様な行為の誘発」、「他者との関係」（親しい他者・見知らぬ他者）という視点で分析した。考察として、各空間への適用、「行為の保証」の低減による「迷い」の空間形成と「多様な場所の提供」・「多様な行為の誘発」の空間形成、他者との距離の取り方について述べた。

第6章では、結論として、各章の知見を総括し今後の展開を述べた。総括を述べた後、本研究が提案する状況を排除する方向にある杓子定規なユニバーサルデザインの適用による公共空間について問題を呈し、コミュニティ形成支援のためには、特に子供が大きく関係する施設には、最低限のバリ

アフリーの適用による空間づくりの必要性を述べた。今後の展開として、コミュニティの維持や形成の基盤としての空間の位置付けを明確化する必要性と実践の展開について述べた。コミュニティ形成上に重要な「空間を伴う経験」の他者との共有にとって、「押し入れ」のような他者の身体感覚を感じることで日常的な小さな空間の重要性や、広い範囲のコミュニティ形成に対する歴史的建造物の重要性を明確にすることが必要であることを述べた。また、実践については、「お堂」「お城」に内包される境界性がコミュニティ形成にとって重要であると捉えることができたことから、その関係性を読み解き、組み込みながら展開し、現代の公共空間の在り方を問い続ける必要があることを述べた。

審査結果の要旨

受審者西郷正浩氏の研究《「行為の保証」をくずすことによる「迷い」～コミュニティ形成支援を目的とした他者・空間を意識する空間～》は、コミュニティ形成の不全を現代社会における重要な問題と捉え、人と空間との関係性について独自の視点で分析する。それに基づき、人と空間、および人と人との有機的な関係性の構築を促すような、コミュニティ形成支援の為の新たな公共空間を創作し、提案する、というものである。

現代では、「コミュニティ」という言葉は、コミュニティの前提となる共同性や共同の作業を持っていない状況、孤独、孤立死の問題、引きこもりの高齢化などの問題とともに語られることが多い。災害などによる直接的なコミュニティの喪失や村落の過疎化が原因となる場合はもちろん、現代の都市で、行政により区分けされた自治会や町内会が存続している場合でも問題が深刻化しているのが現状である。このような無縁社会化、コミュニティの不全と新たなコミュニティ形成に向けて、さまざまな支援がなされる。個別に家々を訪問し作業を助ける人の組織化、伝統行事の復活などを機に人のつながりを生み出し地域の活性化を図る、新しい価値観に合わせたイベントの企画とその企画の実現に加わる人の組織化、そしてそれら組織と活動をおさめることのできる公民館、コミュニティセンター等、施設の建設である。コミュニティの再構築、新たなコミュニティ形成は必須でありながら、しかしこのような既存価値への収斂、伝統的価値への回帰、あるいは外部にある価値に依存するような支援では、生活の個別化・価値観の多様化による社会事象の変化などのコミュニティ不全の根本的な原因と向き合っていないという批判もなされる。

本研究の意義と成果は、このようなコミュニティ形成支援の方法を模索している時代にあって、コミュニティの定義づけ、現代的意味をあらためて検証することによって、コミュニティ形成支援に向けた新たなアプローチを見出したこと、これを理論によって説き、明らかにしながら、実践に於いては、試行を繰り返し、最終的に実在の公共空間として実現したこと、これら一連の研究活動によって、このアプローチがコミュニティ形成支援の一つの方法として有効であることを実証し、今後さまざまな現場への展開の可能性を示したことにある。

氏はコミュニティ支援の方法を模索するにあたって、コミュニティがどのように育まれ醸成されていくかについて研究する。ある限定された物理的空間にいる自己と他者との間で相互作用が生まれ、それが経験として共有されることにより、そこが意味空間となり、同時に共同経験として共有される。更にそこが歴史的にある社会的役割を果たしていくことにより、社会的空間として世界の人々に認知され、より多くの人々の間で経験が共有されていく。このように、コミュニティは初めから出来事やそれに基づく行事があり、それを運営する制度や組織があることで強化されるようなものではなく、コミュニティの形成については、発生からそれがかたちづくられるまでには段階があり、これがサイクル状に発展することにより育まれ醸成されていくものと捉える。このようにコミュニティ形成の過程は、自己と他者、空間での経験とその共有というプロセスが段階的に、そしてサイクル状に発展的に繰り返されることにより、より強固に、確立されていくものであるとする、「コミュニティ形成のサイクル」として示した点を革新的であると評価できる。さらに、この「コミュニティ形成のサイクル」の動力源としては、このサイクルの出発点であり核となる、自己と他者

や空間の意識的経験の共有に必要となる「空間イメージ」の生成と明確化が必要であり、それには、そこに参加する者の行為やふるまいなどについての「迷い」を起こすが鍵となると説く。「空間イメージ」の獲得には、自分がどのような位置、態度をとるかという戸惑い、そこから立ち上がり能動的に行動を起こすプロセスが必要であり、そのような行動を促す空間づくりも鍵となるとする。このように、本研究のタイトルの一部ともなり、制作、実践のキーワードともなった、他者や他者のいる空間へ介入した際に起こる、この行為の「迷い」についての積極的な概念導入は本研究独自のものと評価できる。一般には、「迷い」はネガティブな言葉と解され、現代の公共建築は、この行為の「迷い」を生じる可能性が低くなるような、「行為の保証」が行われており、皮肉にもそれがコミュニティ形成を支援するような生きた空間となっていないと指摘する。本研究では、以上の論考を推し進めるとともに、これを実証し、考察を深める実践も研究期間を通して、小学校の体育館、図書館などの公共空間や仮設住宅などの現場で繰り返し行われている。マンガミュージアムでの実践では、太い柱枠で構成された四角い空間が5基、それぞれ、畳が床に用いられたもの、穴が設けられたもの、階段が設けられたもの、直方体の箱が設けられたもの、絨毯が敷かれたものなどタイプの違うものが、通常の読書するための椅子や机にかわり設置された。そこでは、利用者の「惑い」が観察されるとともに、しばらくして、しゃがむ、寝転ぶ、壁に向かう、隣り合うなど様々な姿勢で読む姿も観察された。活況の中、窮屈な空間での多数の利用者の読書風景もみられるなど、能動的な意識を持って利用するというマンガミュージアムの、「空間イメージ」が利用者の中で明確になっていく。それが更なるリピートを呼び、結果として、一年間を予想した利用者数を3か月で超えるという効果にあらわれた。

以上、論文、制作実践一体となって進められた本研究は、新たな知見を含んでいると判断され、また、その実証に向けた様々な意欲的な活動も実社会に成果として還元されている点においても、本学美術研究科博士（後期）課程の水準を超えていると判断された。